

戦争と公害は ツナガル

【1】1945年7月24日 四日市第二海軍燃料廠に投下された模擬原爆パンプキン

【2】5年社会科「マンガ『ソラノイト』を読んで考える四日市公害」

【3】パンプキン・コンビナート、そしてフクシマ 四日市で原発を考える

三重県教職員組合

早川 寛司 (ハヤカワ カンジ)

四日市市立大矢知興譲小学校

今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次教研では、前次より引きつづき吉井美知子さん（沖縄大）と谷良純さん（相賀小）を助言者に迎え、それぞれの報告者をもとに、以下の2本の柱にそって討議を深めた。

（1）地域教材をいかした平和教育のとりくみ

桑名支部の伊藤さん（光風中）から「平和を創り出す教育をどのように進めるか」という報告がされた。「戦争をなくすための9つの方法」「桑名空襲」を教材化し、当時を自分ごととしてとらえ、これからの平和について考えさせる実践であった。平和への意識調査をクラスでとりデータ化することで、子どもたちの意識の現状を的確にとらえることができた。

鈴鹿支部の山田さん（創徳中）から「現状から出発した平和教育」という報告がされた。部活動の一環で鈴鹿市の戦争遺跡の現地フィールドワークをおこない、まとめたものを文化祭で全校生徒、保護者に発表し、模造紙にまとめたものを展示教室に展示するとりくみであった。自分の身近なところにある戦争遺跡に、実際に現地に赴き目で見て、その場で説明を聞くことで、身近なところで戦争があったという実感をもつことができた。

亀山支部の吉川さん（亀山南小）から「事実を知り、体験する学びを通して」という報告がされた。国語科「一つの花」や平和に関する絵本の紹介を子どもたちがおこなうこと、市内の歴史博物館の出前授業を活用したことで事実を知り、おやつがまん週間、その後の戦争中のおやつづくりを設定し、少しでも当時の気持ちを体験しながら考えていくというとりくみであった。当時と今の実態は違えど、当時の気持ちに近づいて考えるという視点で効果的であった。

伊勢支部の辻さん（明野小）から「自分史を振り返った教材の追求。今、語り継ぐ方法について」という報告がされた。戦場から生きて帰ってきた実父の手記や短歌を絵本の形にして教材化し、子どもたちに伝えていくという実践であった。戦争体験者ではない語り継ぎ手として模索し、次の世代につなげる営みを考えていくとの重要性を訴えかける報告であった。

三泗支部の早川さん（大矢知興譲小）から「戦争と公害はツナガル」という報告がされた。県内に投下された模擬原爆「パンプキン」の着弾地を調査していくなかで見えてきた戦争と公害のツナガリを子どもたちに伝え、考えさせることで戦争・公害さらには原発問題など、今必要な平和についての考えを深めていく実践であった。実践のなかで、教材・書籍・企業・人などたくさんのツナガリがあり、机上の空論にならず、直接ツナガッタものがどれだけ子どもの心に響くかが実感できる実践であった。

（2）学校行事や授業を通した平和学習のとりくみ

鈴鹿支部の船木さん（飯野幼小）から「平和について考える～読み聞かせや国語教材を通して～」という報告がされた。「ぞうれっしやがやってきた」「かわいそうなぞう」「8月6日のこと」「ぼくがラーメンを食べるとき」を教材として読み聞かせの実践や、国語科「ちいちゃんのかげおくり」を学習する際、教員自身が行ったヒロシマ平和行動での学びを子どもに伝えることで戦争の話が物語のなかだけのものではないことを伝え、平和を守るために行動することの大切さを感じさせる実践の報告であった。

松阪支部の脇野さん（山室山幼小）から「集会から感じた平和への土壌 戦争・平和をどう子ども達に伝えていくか」という報告がされた。子どもたちが全校集会の場で自分の考える平和について考えたものを発表し、絵本「へいわってすてきだね」を全校で共有した。平和とは何か、多くの子どもたちが集会の感想から自分の考えをもつきっかけをつくることができた。

志摩支部の松尾さん（鳥羽小）から「つなぐことを大切にした平和教育」という報告がされた。つなぎ手としての支部青年部が主体的に自らの力量を高めるために行動することが大切と考え、学習会を開き、学びあい、学びとったことを子どもたちに返していくという思いのもと、若手教職員が実践をしてきたことの報告であった。

三泗支部の江口さん（西朝明中）から「第五福竜丸事件から考える」がされた。映画「ゴジラ」の鑑賞をきっかけに、第五福竜丸事件について調べ学習をし、知識の充実をはかった上で、修学旅行で第五福竜丸展示館の見学に訪れた。学習のなかで出てくるキーワードを再度調べる学習をおこなうことで、第五福竜丸事件だけでなく、関連する事柄に触れ、自分たちが何をすべきか、子どもたちに考えさせることができた。

成果と今後の課題

今次教研では、若手教職員の報告が増えてきたことが成果だといえる。今後も平和教育の輪を多くの世代につなげていくとりくみが必要である。それぞれの実践報告からは、子どもの実態、社会の実態に関心を寄せ、報告者の想いが授業や活動をつくり、究極の人権教育として実践につながっていることを助言していただいた。課題としては、事実をもとにして学習をしたことを、今に、そしてこれからにつなげていくことがあげられる。地域性や政治、身の回りの生活実態など多くの要素がからみ、「憲法」「原発」「沖縄」など現代社会の問題につなげることのむずかしさが報告者の声からもあがってきた。また、まだまだ各支部、各分会によって平和教育のとりくみ方の差が大きいことも課題である。教員自身が一步を踏みだし、身近なところから、身近な人とつながり、できることを考え実行に移していくことが確認された。

【1】1945年7月24日 四日市第二海軍燃料廠に投下された模擬原爆パンプキン

2013年佐賀で開催された全国教研・平和教育分科会で、長崎の報告者から、長崎に投下されたファットマンと同じ大きさのパンプキンという模擬原爆が原爆投下訓練として全国に投下されている、ぜひ、全国で、パンプキンについて調べていただけないか、という発言があった。そこで、2013年の6月、三教組三西支部・平和教育推進委員会に、パンプキンについて1990年代から調査をつづけている愛知の金子力さんを招いて「模擬原爆パンプキンと四日市」と題してご講演いただいた。その際、金子力さんから、1945年8月8日の2発のパンプキン着弾地点は特定されているが、同年7月24日のパンプキン着弾地点が判然としない、四日市の四郷村役場の四郷村防空日誌の7月24日に「七時四十五分 前ノ山ニ投弾」とあるのが、パンプキンの可能性がある、調べてみないか、と提起された。それが「1945年7月24日の模擬原爆パンプキン」掘りおこしのはじまりであった。

広島・長崎への原爆投下の前（1945年7月20日から8月14日）全国30の都市に49発の模擬原爆パンプキンが投下された。長崎に投下された原子爆弾と同じ形・同じ重さ（約4.5トン）。原爆同様にB29が一機で一発だけ投下していく。全国で415人の死者が出ている。そのなかで、1945年7月24日に四日市に投下されたパンプキンの着弾地点が71年間、不明であった。犠牲となられた方のお名前も不明であった。それを2016年8月ついに突きとめることができた。金子力さんにうかがってから3年以上かかった。

着弾地点は四日市市泊村にある「安政池」の東側の土手であった。当初、大阪府堺市の古河電工を攻撃しようとしたが地上は雲で覆われていたため、目標を四日市に変更し、鈴鹿山脈を越えて飛来したB29が第二海軍燃料廠をねらって、パンプキンを投下。しかし、四日市も一面、雲で覆われていたため、目視ではなくレーダーを使っての投下となり、目標地点より1.5km手前の安政池の土手に着弾。安政池のすぐ北側には、海軍官舎があり、朝の食卓についていた29才の母と8才の男の子をパンプキンの破片が直撃した。

2016年3月から8月にかけて四郷地区の多くの方のご協力のおかげで、着弾地点が判明していった詳しい経緯は「空襲通信第18号2016年8月」（空襲・戦災を記録する会全国連絡会議）に「1945年7月24日四日市第二海軍燃料廠のパンプキンを探して」として収録された。そして、そのことが読売新聞（2016年7月31日）で報じられたりすると、新たな情報も寄せられ、ついにご遺族も判明し、さらに詳しい被災の状況があきらかになっていった。

<1>日本新聞協会 第7回 いっしょに読もう！新聞コンクール」に、みんなで応募

5年生の国語に「新聞を読もう」という単元がある。新聞の見出し、リード文などについて学習し、新聞を読もうという意欲をもたせる単元である。そこで、読売新聞（2016年7月31日）の「模擬原爆着弾地一つ判明」の記事を教材として活用した。

クラスみんなで新聞記事の見出し、リード文を確認し、本文を読んだ。その後、「いっしょに読もう！新聞コンクール応募用紙」を、学校で、家庭で記入してもらった。9月の応募締切ギリギリに速達で送った。その審査結果が11月末に届いた。Aが全国奨励賞を受賞という知らせが届いた。

Aはもちろん、クラスみんなが全国奨励賞受賞の知らせをよろこんだ。わたしもAをたたえるとともに、クラスのみんなに「君たちみんなが新聞記事を読んで、よく考えてくれて、応募した。その結果がAの全国奨励賞になったのだと思います。クラスを代表して、受賞してもらったと思いますよ」と話した。Aの文章の「柱」は、パンプキンの空襲体験を次へ次へつないでいきたい、この新聞記事を読んで、そう決意したということであった。この「つなげる」という気持ちがこの後の「戦争と公害はツナガル」の学習にも（まさに）つながっていったように感じる。

1945年7月24日は四日市へのパンプキン投下だけでなく三重県全体が空襲をうけた。特に津では1200人の犠牲者を出す大空襲をうけていた。また、今次の三重県教研では、桑名でも、7月24日、面積当たり全国一の大量の爆弾が投下され、267人の犠牲者が出ていること、鈴鹿でも海軍工廠をねらった空襲で160人をこえる犠牲者が出ていることも報告された。午前7時45分のパンプキンを皮切りに、1945年7月24日は、白昼、三重県全体が大規模な空襲をうけた日であることにあらためて気づかされた。二度と、このような戦争の惨禍が繰り返されることのないように「記憶」を「記録」し、子どもたちに語りついでいかなければならないとあらためて認識させられた。

【2】5年社会科「マンガ『ソラノイト』を読んで考える四日市公害」

1945年7月24日、1機のB29が原爆投下訓練用爆弾・模擬原爆パンプキンを四日市第二海軍燃料廠をねらって投下した。しかし、71年の間、どこに落とされたのか、犠牲になられた方が誰か、わからなかった。それを、2016年、多くの方の協力で突きとめることができた。1972年9月に四日市ぜんそくで亡くなった女の子を描いたマンガ「ソラノイト」（矢田恵梨子作）が『空の青さはひとつだけ』（くんぷる出版）に収録されて出版されることになった。出版記念の会が2016年7月24日に開かれた。その席上であらためて気づいた。1972年7月24日は、四日市公害裁判勝訴の日、1945年7月24日は、四日市にパンプキンが投下された日。戦後、第二海軍燃料廠跡地がコンビナートとなり、公害が発生し、多くの犠牲者を出した。戦争と公害が「ツナガル」ことに気づいた。「第二海軍燃料廠・パンプキン・コンビナート・四日市ぜんそく」子どもたちに、これらをつなガルように考えさせる授業はできないかと考えた。まず、東海テレビで放送された「記録人 澤井余志郎」中京テレビ「キャッチ 模擬原爆の真実」を子どもたちに視聴させた。

【第1時】

①マンガの題名「ソラノイト」漢字で書くとすると、どう書きますか。

これは、5年1組では全員が「空の糸」と書いた。隣のクラスでは「天国の糸」と書いて「そらのいと」と読むという意見も出た。2017年度の学級では「空の意図」という意見も出た。

②なぜ、そう書きましたか。「ソラノイト」の意味は何でしょう。

B「カタカナで書いたほうが迫力というか、何か訴える感じがあるような気がします」

C「次の世代へと。親から子へと。四日市の人たちだけでなく、全国の公害のことを知らない人みんなに伝えていきたい」

◎「実はね、このマンガ、左からめくるでしょう？文字も横書きで書いてあって。これは、なぜだと思う？」

D「翻訳するためだ！」

◎「そうなんだよ。作者の矢田恵梨子さんは、外国の人たちにも読んでもらいたいという気持ちをこめて、このマンガを書いたんだ。じゃあ、何を伝えていきたいの？」

E「四日市ぜんそくという過ちを繰り返さないために、伝えていきたいという気持ちがこめられていると思います」

F「空と人の命は糸でつながっているということだと思います」

◎「空と命はつながっている。どういうことかな？他の人でもいいよ」

G「空と、人の命だけでなく、動物の命もつながっているんじゃないかと思いました」

◎「動物！どんな動物？昨日、四日市公害と環境未来館で聞いたこともあるね」

ここから、ほとんど大勢の子たちが口々に、言う感じになった。

H「トンビ」 I「スズメ」 J「ツバメ」 K「金魚も死んだって、言っていました」

L「梅雨時の臭い夜、雨が降ると、池の金魚が死んだと言っていました」

◎「だから、ソラノイトというのは、どういうことになるのかな」

D「動物の命と人間の命がつながっている」

G「全世界と空がつながっている」

【第2時】

おばあちゃんのことば「四日市には、戦争のための燃料を作る工場があつてなあ・・・空襲でねられて、ほとんど こわされてしもたんよー・・・」 「その土地を利用して、国の方針で、おっきな石油化学コンビナートを作ったん・・・」

①戦争のための燃料を作る工場を作ったのは？

H「政府」

◎「これは、6年生で勉強することなんだけど、戦争はだれがはじめたか、日本国憲法に書いてあるんだ。憲法前文に、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにって書いてある。四日市に、戦争のための燃料を作る工場を作ったのも、まちがいなく、日本の政府ということだね」

②その土地を利用して、石油化学コンビナートを作ることを決めたのは？

M「政府だと思います」 N「国だと思います」

◎（『空の青さはひとつだけ』19ページ）「おばあちゃんが、「尚子、ごめんしてな・・・」とあやまっています。おばあちゃんが、尚子さんにあやまらないといけないのですか？尚子さんにあやまらないといけないのは、だれだと思いますか」

F「三重県だと思います」 O「国だと思います」

◎「どうして、三重県や国が謝らないといけないの？」

B「こんな公害が起こると、予想できなかったのは、三重県にも国にも責任があると思います」

C「公害対策をしなかった責任は、6つの会社全部にあると思います」

P「四日市ぜんそくを引き起こしたのは、この6つの会社だから、謝らないといけないと思います」

【第3時】『空の青さはひとつだけ』33ページ

①1972年9月2日、谷田尚子さんは「ぜんそくの発作が引き起こした心臓まひ」で亡くなっています。尚子さんのお母さん・谷田輝子さんは「なんで尚子が死ななあかんの！！」とさげびます。とてもむずかしい問いかけです。あなたなら、どう答えますか。

Q「学校を転校するのがよかったんじゃないかなと思います」

R「四日市ぜんそくって分かってすぐに家も学校も遠くに引っこしていたら、よかったと思います」

※後で、Rは、輝子さんを責めるのではなく、輝子さん自身の「後悔」の念をことばにしたという意味のことを言っていた。Qは、そのことばどおり「転校すればよかったのに」という意味で言ったそうだ。

◎「二人の意見をどう思う？」

B「輝子さんが、尚子さんの話をあまり聞いてなかったから、もっと聞いてあげればよかったという気持ちがあると思います」

S「輝子さんが悪いということではなくて、輝子さんの後悔の気持ち」

◎「後悔の気持ちだけ？」

T「怒り、国への怒り。輝子さんは後悔だけではなく国への怒りもあり、このことばを言ったと思います」

U「国が公害対策の対応をしなかったから、国に対して怒っていると思います」

V「輝子さんたちが悪いのではなく、政府や6つの会社などが、もっと公害の対策などをしていたらよかったと思います」

◎「全部、意見は出尽くしたかな？ Qさん、どう思った？」

Q「Uさんの『国が公害対策の対応をしなかったから』、Tさんの『国への怒り』という意見を聞いて、政府と6社が悪いという意見に変わりました」

◎「なるほど、Qさん、考えを変えたのだね。では、次の問題も考えていきましょうか」

②46 ページ「みんな、最初は分からなかった。公害が命をうばうなんて・・・」

◎「戦争」と「公害」の共通点は、何ですか。

U「死ぬ理由がないのに、犠牲者が出ること」 E「死にたくないのに、巻きこまれる」

M「自然も破壊される」

◎「戦争も自然破壊か」

Q「戦争も公害も政府が決めていることだと思います」

※はじめ「転校すればよかった」と言っていたQの発言。

T「どちらも、国が犯した過ち」 X「政府が勝手に決めた」 G「政府が勝手に決めたのかな？」

B「コンビナートを作るとき、はじめは『いいぞ、いいぞ！』と言っていた」

Y「戦争も、はじめは、市民も『いいぞ、いいぞ！』と言っていてはじまった」

G「国民、市民が反対していたら、変わっていたかも・・・」

◎「なるほど、戦争も公害も国民がもっと反対していたら、こんなにひどいことにはならなかったのかな」

F「戦争も公害も、たくさんの人の命が奪われている悲しいことだから、次の世代へと語りつなげなくてはならないことが共通点だと思います」

C「戦争も公害も、どちらも命が失われ、後になると、国を恨む」

G「国民も自分勝手、国に罪をなすりつけている。谷田さんも少し悪い、四日市もよくなると思ったのだから」

B「谷田輝子さんもジーパンもたくさんの人が買ってくれるようになるとよろこんでいた」

S「だから、そういう自分を責める気もちもあって、さっきの輝子さんのことには、自分への怒りや憎しみ、悲しみがこもっていると思います」

E「輝子さんの、自分への怒り。はじめは『いいぞ！』と言っていて、そのことを後悔する。戦争も、輝子さんも」

B「どちらも、人が生みだしたことで、人が死ぬ」

◎「なるほど、戦争も公害も、人間のしたことだということだね、自然に起きたことじゃない」

V「さっきの輝子さんの声は、自分もコンビナートができると、お客さんもふえて、もうかると思って、最初は賛成していたけど、尚子さんがぜんそくになって、はじめ、よろこんでいた、こういうことになると気づけなかった自分に怒っていると思います」

C「どちらも、国に裏切られた気もちになる」 Y「住宅地で、被害が出ている」

B「人が生みだしたもので、人が死ぬことが同じだと思います」

【第4時】 「空の青さはひとつだけ」 49 ページ

◎「公害を起こさないで」この言葉はだれの言葉でしょうか。

四日市公害犠牲者慰霊祭のマイクの前に立っている「現代」の女の子。

◎「この女の子だと思う人？」　ほとんどの子が挙手。

◎「その女の子の前にあらわれた『谷田尚子さん』だと思う人？」　これも、ほとんどの子が挙手。

T「だって、先生、吹きだしが尚子さんからも出ているよ」

実は、わたしは、子どもたちに言われるまで、吹き出しの形に気がつかなかった。子どもの目のたしかさに感心した。

◎「この二人が言っていると思う人？」　今度は、全員が挙手。

◎「このシーンは、谷田輝子さんが『子どもたちが「尚さんの願い」という手づくりの絵本を朗読してくれたとき、死んだ尚子の姿を見るような思いがしました』と言われたのを耳にした漫画家の矢田恵梨子さんが、こんなふうに、漫画にして表現したんだよ。このことばにつづけて、あなたなら、何と言いますか」

Y「世界の人に公害の苦しさを知ってもらい、公害を二度と繰り返さないでください」

U「いくらお金を払っても、命は戻ってこない」

※この後「お金を払っても」という発言が何人か、つづいた。環境未来館で視聴した映像に、裁判で負けた企業が鞆から札束をとりだしているシーンがあった影響か。

R「人だけではありません。命があるものが次々に命を落としていきます」

D「もうこれ以上、生物の命を奪わないで。もうこれ以上、自然を破壊しないで。いろいろな人が悲しみます。もう公害という悪夢を繰り返さないで」

Z「公害という苦しみを、まだ公害のことを知らない人たちに、次々とつなげて、二度と、この過ちを繰り返さないようにしてほしい。植物や人間以外の動物も命を落としている。みんな、まだ未来があるから」

M「公害と戦争は人が生みだしたことから、人が生みださなかったら起きない」

Q「尚子さんのお母さんの輝子さんなら、『公害で人を苦しめないで』と言うと思います。わたしは、輝子さんも、おばあちゃんも悪くはないと思います。なぜかという、公害は政府がコンビナート建設を決めて起こったからです」

※Qは、前時のはじめ、「転校すればよかったのに」と発言していた。

A「公害をまた起こすということは『戦争』をまた起こすのといっしょだと思います」

L「公害は、政府が起こしたものです。子どもも死にたくないのに死んでしまう。そんな悲しいことを政府がしているなんて思いもしなかったです。もう繰り返さないでほしい」

N「公害も戦争の怖ろしさも、次の世代へと伝えていけばいいと思います」

J「みんなが悲しい思いをするから。戦争や公害は、みんなの笑顔を奪うから」

B「国の決めたことで大勢の人がなくなっています。戦争も公害も人の命を奪っていったことを、知らない人に伝えていけばいいと思います。人間だけでなく、動物の命が奪われてしまいます。同じ事を起こさないでください。亡くなった命はもどらない」

C「戦争と公害では、まだ小さな命でもたくさん亡くなりました。あのときに、政府などコンビナートを作った人たちが、もっと考えたら、尚子さんだって、他の人だって死んでしまうことはなかった」

◎「政府が・・・もっと考えたら、よかったんだね？」

D「わたしたちみんなも考えたら、よかった」　E「市民が考えたらよかった」

◎「わたしたち市民が考えたら、いいということ、何十年もつづけてきた人が誰なの？」

「野田之一さん」「澤井余志郎さん」

B「これ以上、犠牲を出さないで。お金をはらってもどんな命も帰ってきません。これ以上、大切な人が死んでしまうのは見たくない。公害のような過ちを起こさないで、と尚子さんは言うと思います」

【12月6日 マンガの作者・矢田恵梨子さんからの電話】

マンガの作者矢田恵梨子さんに、授業プリント、授業記録を読んでいただいた。すると、いちばん、苦心した場面3つを、子どもたちに考えさせるポイントとして選んでもらって、うれしかったということ、子どもたちの反応がとてもよく、こんなに考えてくれたのだと、うれしく思ったということであった。特に、マンガのなかで、おばあちゃんが「尚子、ごめんしてな」と謝って、尚子ちゃんを抱きしめるシーンは、四日市公害認定患者であり、裁判の原告である野田之一さんを矢田さんが取材したとき「ぜんそくで苦しむ尚子さんをどんなに看病しても、どうすることもできやんもどかしさを一番感じてたのはおばあさんやからな。その気もちを考えたれよ」という野田さんのことばをうけて、この抱きしめるシーンを描いたと教えていただいた。

【戦争と公害はツナガル】

戦争と公害をつなげて考えてみることは強引なのだろうか、と思うこともあった。「四日市公害を語り継ぐ(1)その前に戦争公害があった」<栗屋かよ子(元四日市大学環境情報学部教授)・伊藤幹郎の対話集>に次のようなことが書かれていた。

栗屋「『戦争公害』とは、戦争を公害に見立てた表現ですが、公害を『第二の戦争』と言った方もおられます。(四日市ぜんそくの夫が自死した女性のことば)両者(戦争と公害)とも国策で、そこに住んでいるというだけで避けることができず巻き込まれた災難という性格が浮かび上がるように思います。」栗屋かよ子さんも、このように述べておられる。これは、授業のなかで子どもたちから出された次の声とつうじる。

E「死にたくないのに、巻きこまれる」 Q「戦争も公害も政府が決めていることだと思います」

T「どちらも、国が犯した過ち」 C「どちらも、国に裏切られた気もちになる」

5年生の子どもたちもこれだけ考えることができたのである。この実践を構想しはじめたときは「戦争と公害はツナガルのではないかな?」と感じていたことを、今は確信をもって断言できる。「戦争と公害はつながっていた!」と。「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」(日本国憲法前文)公害も同じである。繰り返すことは許されない。

【3】 パンプキン・コンビナート、そしてフクシマ 四日市で原発を考える

四日市には戦時中、第二海軍燃料廠があった。それを攻撃目標として、原爆投下訓練の模擬原爆・パンプキンが3発投下された。戦後、海軍燃料廠跡地はコンビナート用地として払い下げられた。戦争と公害がツナガルこと(どちらも国策であること・生命を軽んじていること・小さな子も犠牲になること等)を学んだ子どもたちは、福島原発事故についても問いかけはじめた。

(1) 地図帳からの「クイズ」

2017年3月3日(金) 朝の会で、クイズ係のAが出題した。

「一日一人あたりごみ排出量、都道府県別で一位の県は次のうちのどこでしょう。」

1 群馬 2 福島 3 青森」

子どもたちは、それぞれ思う県名に手をあげた。

「答えを発表します。3位群馬、2位青森、1位福島」

Aは帝国書院の地図帳「日本のすがた 都道府県別の統計」の「一日一人あたりごみ排出量2012年」を見て問題をつくった。

「では、先生からの問題。2012年福島県が一日一人あたりのごみの量が多い理由は何でしょう。」
福島原発事故の問題をとりあげようと思っていた矢先に、地図帳から「よい問題」を出題してもらった。

(2) 2011年に何があった！

2017年3月6日(月)

2010年の「一日一人あたりのごみ排出量」を調べると、福島県は14位だった。

ごみ一日一人あたり出す量 2010年 福島14位(985g) 2012年 福島1位(1094g)

「2011年に何があったの？ そのことと、福島県のごみが増えたことは関係している？」

B「それまで、人々がだいじにしていた物が地震や津波でごみになってしまったのだと思います」

「2011年3月11日午後2時46分に起きた地震・津波で、それまで、人々がだいじにしていた物がごみになってしまったんだね」

(3) 手紙を出そう！

2017年3月7日(火)「原子力発電は、いつからはじまったのか、どのようにはじまったのか」
子どもたちの追究がはじまった。まずは、4人の子たちがインターネットで調べてきた。

「インターネットで調べた人ばかりだけど、インターネットというのは、ほんとうの情報かどうか
たしかめないと怪しいね。どうたしかめたら、いい？」

Cは「中日新聞に手紙を出してきいてみようと思います」

「〇〇電力にきいてみる。」と言ったのはD。

「君たちがきいてみたいと思うならやってみようか」

(4) 水俣・四日市公害・福島 差別・いじめ

2017年3月9日(木) Eの自主学習ノートに

「四日市市立博物館の『水俣病の展示』を見に行きました。水俣病の人や、その家族は、みんなに差別されました。うつるから、あっち行ってとか言われたそうです」と書いてあった。みんなに読んで聞かせた。

「『四日市公害と人権』という本があります。(小中学生むけの副読本・市内の小中学校に配備されている)ここに『公害病はうつる 母親が公害病の子と遊んだらあかん、うつるよって、言うんです』っていう話がのっている」と紹介した。子どもたちは

「水俣といっしょや」

とうなった。

(5) 毎日小学生新聞に手紙を

2017年3月14日(火) 中日新聞・毎日新聞、△△電力・〇〇電力に送った手紙・ハガキに対する返事は、まだ届かない。(中日・毎日からは後でいねいなお返事をいただいた)

今日は、Eが書いた手紙を毎日小学生新聞にファックスで送信した。

(6) 「福島県民が悪いの？」

社会科の時間、教科書を読みすすめた。日本文教出版の「福島第一原発事故」を読んだ後、2016年・法務省人権擁護局長賞を受賞した「福島県民お断り」という作文(中学3年生の作文)を読み聞かせた。

文中の「『福島県民だ』と悪者扱いでもされるのか」の一節を子どもたちに問いかけた。

「福島県の人たちが悪いの？」もちろん、「ちがう」という声が返ってきた。

「じゃあ誰が悪いの？ 福島県の人が悪いと思う人？ 誰もいない。じゃあ誰が悪いの？」

F「原子力発電所を作った会社が悪いと思います。会社と国が作って大惨事になったところが公害と似ていると思います」

G「国が悪いと思います。理由は、原発は、国をもちあげようとして、はじめたことだからです」

H「ぼくはちがいます。誰も悪くないと思います。公害のときといっしょで、作られたときはみんなよろこんだ。公害のとき、企業6社が悪いと言った意見もやめます。市民もはじめはみんなよろこんだ。だから原発も誰かが悪いのではなく誰も悪くないと思います」

「Hは、みんなを悩ませるような深いことを、いつも言ってくれるね。津波で原発がたいへんなことになると予想した人もいなかったわけじゃないけどね。まず会社が悪いと考えた人たちの意見を聞こうか」

I「四日市公害と似ていて、よいことだけを考えていて、後に起こるかもしれないよくないことを考えないで、原子力発電所をつくろうと決めた会社が悪いと思います」

J「公害も戦争も原発も国が決めて起こったことです」

F「誰も悪くないというのは、反対に言うと、全員が悪いことになると思います」

※「ああ、そうか」という複数の声が聞こえた。

H「生活がよくなると思って、賛成した人たちが悪いと思います」

L「三重県では（南島町で）反対して作らせなかったのだから、真剣に反対していたら、原発は作られなかったと思います」

M「公害でも被害が出ていたのだからよくないことが起こると気づかなかった国が悪いと思います」

「四日市公害の裁判がはじまったのは、いつだった？」Mが教科書をめくって、見つけた。

M「1967年です」

「原子力発電所が動きはじめたのは、いつだった？」

「1966年」

N「国も予想できたはずだと思います」

H「予想できなかったと思います。予想できて、福島県に原発を作ったのなら、福島の人たちへの嫌がらせだと思います」

「地図帳を見ようか。原発のある県を言っていくよ、原発に赤鉛筆で○をつけてみて。」

北海道・青森・宮城・福島・茨城・新潟・石川・福井・島根・山口・佐賀・鹿児島・愛媛・静岡」すると、「いながが多い」という複数の声。

O「事故を予想してたんや。事故が起こってもいいように、人が少ない所に建てたんや。人が多い所に建てたら、被害が大きくなるから」

「なるほど。地図帳に○をつけて、気がついたんだね。よく考えたね」

（7）社会科の授業「戦争・公害・原発」は・・・

2017年3月15日（水）「きのう、戦争と公害と原発は似たところがあるということになったね。どこが似ているのだった？」

子どもたちは口々に「どれも国がしたこと」「被害が起きたときの対策をしていなかったこと」

「だから、被害が出たこと」と答えた。

「小出裕章さんという原子力のことを研究してきた先生は、『戦争と原発は似ているどころか関係が深い』と言っている」ここまで話すと、Pが発言。

「原発で武器を作っているということですか？」

「小出裕章さんが書いた本があります。この本を読みます。」『小出裕章さんのおはなし』（クレ

ヨンハウス) 26ページを読んだ。

「原発は、原爆をつくるために開発された技術を発電に使ったものです。・・・」

「ということは、戦争と原発は・・・？」

K「ツナガッテイル」

Kにつづいて多くの子が口々に「ツナガッテイル」と言った。この本の65ページの図を見せて説明した。

「原発では、ウランを使って、エネルギーを出すと、プルトニウムというものに変わります。プルトニウムは長崎に落とされた原爆の材料になる。日本の憲法には、陸海空軍その他の戦力、戦う力は持たないと書いてある。『その他の戦力』戦う力って何だろう？」

P「プルトニウムは原爆の材料になるのだから、戦う力になると思います」

「原子力基本法には平和のために利用すると書いてあるから、そのとおりなら、戦力にはならないはずだけどね。これも考えてみてください」

日本国憲法第9条第2項「その他の戦力」は英文では「other war potential」となっている。これは、戦争遂行能力、戦争を可能にする能力、つまり軍需産業のことも意味し、それも放棄すると解釈するのが本来の考え方だということを憲法学者の森英樹先生にお聞きしたことがある。だとしたら、原子力発電所も「戦争を可能にする能力」に含まれ、持つべきものではないと言えないだろうか。(森英樹先生もそう解釈されている。) Pは、直感的に、そのことに気づいたにちがいない。

(8) 毎日小学生新聞西村隆編集長との「最後の授業」

2017年3月16日(木) 毎日小学生新聞の西村隆編集長から、学校に電話がかかってきた。

「四日市公害の学習と原発問題をつなげて学習しているというのは、たいへんダイナミックな問題にとりくんでみえると思います。1955年に海軍燃料廠の跡地が昭和四日市石油に払い下げられた。同じ1955年に原子力の国際会議が開催され、日本でも原子力基本法が成立する。ぜひ一度、おうかがいして、子どもたちにも話をしてみたいし、子どもたちの声も聞かせていただきたいです」

こうして、3月23日、西村編集長が来校された。

西村編集長との授業で、子どもたちは四日市公害も「国の対策」がしっかりしていれば起こらなかったということから、原発も「国の対策がきちんとできるか、できないのか」という点で議論した。最後は裁判所に判断を任せようという意見も出た。戦争も公害も「再び…起こることのないやうにする」力が日本国憲法にあるということであらためて考えさせられた。

(9) 2017年3月24日 5年生最後の日

「鉄腕アトムは2003年4月7日に生まれることになっている。ということは2011年の東日本大震災も、福島原発事故もアトムは見ることになる。だとしたら、アトムはいったい自分をどうしただろう」

そう問いかけた。西村編集長が、原発問題を考えさせる導入として「鉄腕アトム」の話題を提示されたことをうけて、最後に、子どもたちとこんな「対話」をしてみたいと思った。

すると、子どもたちは、鉄腕アトムも原子力から、バイオエネルギー、風力、水力、太陽光を利用するように変えていったんじゃないかと答えた。最後に、わたしは、子どもたちに

「これからも、たくさん本を読み、たくさん人の意見を聞き、たくさん考えて、自分の意見を持てる人になっていってください」

と話した。これが、2016年度の5年生の子たちとの「対話」のしめくくりとなった。